

しかも興味あるように、種々な問題を扱うことに力めた。取組みや、簡略もし、本書によつて、さらに深くこの道にはいることを誘われる人が、一人でもあるならば、著者として、この上の喜びはない。本書著者の抱負を

ていへば、本書の目的は、むしろ著者がいふところにある。

昭和二十二年八月

著者 識

本書は、高砂學対、専門學對等の教科書、または参考書であることを目録に、

附言

國語要講 目次

- 一 序 説(一)..... 一
- 二 序 説(二)..... 三
- 三 文 學 や 交 際 の 字..... 一六
- 四 が 音 と、い つ も 韻(一)..... 三〇
- 五 韻 音 は、何 韻(二)..... 四一
- 六 韻 音 の 變 外 韻(三)..... 五一
- 七 代 文 本 の 韻 法(一)..... 六四
- 八 代 文 本 の 韻 法(二)..... 七三
- 九 代 文 語 と 口 語..... 八七
- 一〇 口 語 の 變 遷..... 九三

一 敬口語の語……………一九六

二 方言と標準語……………二五八

三 新語の作製と漢語……………二九三

四 外文の來語……………三九六

五 語義の變化……………四六二

六 結音語和二十語……………四七二

四 音 韻……………五〇

三 文 字……………五六

二 札 箋……………五三

一 札 箋……………六一

目 次

國語要講

一 序 説 (一)

人は、太陽や空気のないところでは、生きていられない。それでも、太陽や空気がありがたさを、いつも意識しているものは少いであろう。夜になれば電燈がつくと思っている時は、何とも思っていないけれども、いざ停電となると、しみじみ電燈のありがたさが感じられるものである。同様に、われわれは、いつも日本語の中に生活していて、あまりそのありがたさを感じないが、外國などに行つて日本語から離れてみると、日本語をさく嬉しさは非常なもので、今まで知らなかつた人とも忽ち親しくなるということである。「もしそれ、此のことは外國にて聞くときは、こは實に一種の音樂なり、一種天堂の福音なり」とは、上田萬年博士の言葉であるが、博士はなお

三文 字

言語は、人の口から發せられるとすぐに消えてしまうので、遠く、長く傳えるのに不便であるが、文字がその不便を除いてくれる。文字は言語と同時にあつたものではなく、ずつと後の工夫にかかるものであるが、人類の文化は、これによつて非常な發達を見た。

國語を書き表す文字として、われわれは、普通に漢字と假名とをまぜて用いている。わが國には、漢字がたつたわる以前に、既に國語を書き表す文字があつたという説があり、その文字を神代文字といつて、その片鱗を示したものであるが、それらは、そう古いものとは信じられない理由があり、平安朝のはじめ平城天皇の御代に、齋部廣成が撰進した「古語拾遺」の序文に、

蓋聞、上古之世未有文字、貴賤老少口口相傳、前言往行存而不忘。

とあるのが、先ず真相であろうと考えられている。歴史の上では、應神天皇の御代にはじめて漢籍が傳えられ、われわれの祖先が文字というものを知つたことになつてゐるが、大陸との交通はその前からもあつたと思われるから、應神天皇の御代頃には、既にこれを受け入れるだけの豫備が出來ていたのであろうと思われる。日本書紀應神天皇の卷には、

十六年春二月、王仁來之、則太子菟道稚郎子師之、習諸典籍於王仁、莫不通達。

とあつて、そうめずらしげにも記してないのである。けれども、漢籍は、いうまでもなくわが國人に取つては外國語である中國語を書き表したものであるから、これによつて文字を知つたからといつて、直ちに國語が書き表せるものではない。當時の漢籍の學習は、外國語としての學習であるから、恐らく先ず中國音でよみ下し、日本語で意味をつけたものである。漢字は、一字一字があ